戦死した同級生の妹へ

上野友郎
兵庫県・七四・無職

私と同級生であった、あなたの兄さんが亡くなって、もう五十八年も過ぎました。

海軍特攻隊の練習生「予科練」に入隊した兄さんが、四国の松山で、太平洋戦争の「終戦」の前日に、米軍空襲の機銃掃射で負傷して、「終戦」の翌日に出血多量で『戦死』したことは返す返すも残念なことです。

お母さんが、『戦死』の公報で、「何で戦争が終わってから戦死するんや」と、畳をたたいて泣いていたことを今でも忘れません。

「人殺しは絶対にできない」と二人で誓い合ったのに、学校の志願強制で断り切れずに、「予科練」へ行くときに、「ぼくに、もしものことがあれば妹を頼む」と言われていましたが、兄さんとの約束は守られませんでした。

中学生の時は、あなたの家へよく遊びに行き、兄さんより、小六の子どもなりに、かわいくて、かしこいあなたとよく遊んだものです。あなたが「上野君のお嫁さんになる」と言っていたし、お母さんも「上野さんなら幸せにしてくれるだろう」と賛成していました。

私もその気がありました。近所の人も「将来は似合いの夫婦になる」と言っていました。ところが、兄さんの『戦死』で、あなたが一人娘となって、家を継がなければならなくなり、私と結婚できなくなったのです。

私は、終戦後に町役場へ就職したのに、あなたから遠ざかるために神戸で就職しました。

それでも、お盆に田舎への墓参の時には、あなたと一緒に兄さんの墓参に行きますが、ますます美人になっていくよりも、聡明さに「無理をしてでも結婚しておれば……」と思うこともあります。近所の人も「世が世であれば、二人は夫婦であった」とウワサしていることは知っていました。

先日も、あなたの生家の近所へ行った時に、かわいい女の子の小学生に逢って、急に忘れていた昔のあなたのことを想い出したのです。

結婚できなかったことを、心では整理しているつもりですが、今でも残念に思っています。